会していたと分かる。

結婚の時期も不明だが、夫秀世のドイツ留学は楠緒子の夫、大塚保治の留学時期（明治二十九年三月～明治三十三年七月）と同じ頃で、留学時には子供がいたことなどから、遅くても明治二十七、八年頃かと推測する。

結婚して五人の男の子が生まれた。子供の成長、家庭を守ることを優先し、「彼女は後の日（注＝創作に邁進する日のこと）のあるのを待つて隠忍して暮してゐた」と時雨は書いている。自分のやりたいことは後回しにして生活していたことが偲ばれる。そんな生活の中で大正四年（一九一五）頃から夫が病気にかかり、医業を続けることができなくなってしまう。一家の生計が百合子にかかってくる。その時以来、百合子は書道の師範として一家を支えることになる。

百合子は多才な人で、絵は神中糸子（じんなかいとこ）に習った。特に書には才能があり、多田親愛の高弟であった。大内青巒（せいらん）から弘法大師の筆法（大師流）の奥義を伝授され、書法を大成させた。

文学の創作に関して、百合子の散文を上田敏は「小品文は天稟である」、「簡潔でそして尽せる筆は得難い」と推奨していた。敏は廣子の翻訳を賞賛し、同様に百合子の散文も敏の評価を受けている。二人の女性にとって敏はキーパースンだった。

敏が評価する百合子の散文は樋口一葉に傾倒した結果と考えることができる。百合子は「小説も以前は随分好きな方で故一葉女史のお宅へ伺つた事もございました」と一葉のもとで勉強したことを明らかにしている。敏は百合子の散文に一葉の才筆の一端を見いだしたのだろう。

これに関連して、信綱も、

江戸人の洗練せられたる情緒と、義侠の念に富み、婦人のあらゆる教養を修め得たる人

と言っている。同様のことを時雨も書いていて、百合子の教養や人柄が、廣子がハイカラと揶揄したような西洋一辺倒ではなかった事がわかる。

百合子は自己の美意識や感覚、価値観を大事にする姿勢をつらぬき、実際にファッションで流行を生みだしたようだが、流行するやそれをさっと捨てて、さらに新しい方向へ移ったという。そうしたひとつに拘泥しない態度がハイカラと映ったのかもしれないが。

時雨は百合子がもう少し長生きして文学創作の時間が与えられたなら「新傾向の代表作者」となったかもしれないと想像している。百合子が急逝したのは大正八年八月二十八日。時雨の記すところでは死因は急性脳膜炎である。

信綱は弔辞で、

（「心の花」の）同人の中にても井関ぬし（井関照子）、大塚ぬし（大塚楠緒子）、大沢ぬし（大沢国子）など世にあらましかばと折にふれては忍び出づる人々の中に、君をしも数ふることの悲しさぞいはん方なきや

と惜しんだ。

夫、峰秀世について分かったことを記しておく。

『明治医家列伝』（明治二十五年刊）の「峯秀世先生之伝」によると、元治元年（一八六四）十一月二十一日生まれ。肥前国五島奈良尾村出身。明治十六年（一八八三）東京大学医学部に入学。二十一年卒業。専門は内科及び外科。明治二十四年（一八九八）日本橋区本銀町に診察所をひらく。患者には「懇切周到胸襟ヲ披ヘテ而シテ語ル」という態度で接してその「徳風」が慕われたようである。また和歌も良くした。

結婚後ドイツに複数年留学したことは先